



## 【あなたはどうなお母さんですか。】

聖書本文：サムエル第一1章1-11節・暗唱聖句；サムエル記第一1章27-28節

説教者：鄭南哲牧師

## ＜1.親(特に母親)という偉大な存在＞

先週が母の日感謝の主日でしたが、申し訳なく、わたしの不在のため今日、母について御言葉をともに分かち合いたいと思います。愛するクリスチャンプレイズチャーチのすべてのお母様たちの犠牲と献身のうえに神様の大きい恵みと慰めが溢れますように心からお祈り申し上げます。

キリスト教のほどに親を大事にし、親孝行を強調しているところはありません。

16世紀の宗教改革者だったマルティンルーター-先生は“親の方々はこの世の中で神様の代理人たちだ”だと教えました！

16世紀プロテスタントの改革者だったカルビン先生は聖書が教えて下さる親孝行についてこう言われました。

“我々は神様のすべてが理解できなくてまるで矛盾のように見える時がありますが、神の御国に上って行くときすべてが理解できるようになるでしょう。ただはっきりと言えるのは、親孝行をしなかったのに長生きするのは生きるその自体が神様からの罰であることを覚えなければなりません。”聖書の中でもエペソ人への手紙6章2節に“あなたの父と母を敬え”これは第一の戒めであり、約束を保ったものです。”とかかれています。この神様の命令にはほかの律法にはない唯一無二の祝福が約束された律法なのです。出エジプト20章12節を読んでみてください。“あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの年齢が長くなるためである。”、エペソ人への手紙6章3節にも“そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする”という約束です。”とされています。そのように親を敬い、親孝行することがかえって私たちに祝福があり、幸いなることをみんなまず忘れず心に刻んでいきたいと思えます。

みなさんご存知のようにイエス様は十字架につけられた時でさえ肉の母に対する息子としての愛情が表されました。くぎを打たれ十字架につけられ残酷な苦しみと死の寸前、目をあけてそばにいてくれた肉の母マリアを眺(なが)めました。そして有(あ)に残って十字架にまで一緒についてくれた弟子ヨハネを眺めました。ヨハネは弟子たちの中で一番豊かだった弟子でした。イエス様は最後にそのヨハネにお願いする場面が聖書には具体的に記録されています。

ヨハネの福音書19章26-27節です。“女の方。そこに、あなたの息子がいます。”と言われながら、弟子を指し、そして弟子に向かって“そこにあなたの母がいます。”と言われ、二人をつなげていただきました。その時からその弟子ヨハネはイエス様の肉の母マリアを自分の家に引き取ったと書かれています。イエス様は自分がこれ以上母であるマリアの面倒を見る事ができないから、最後の瞬間でさえ自分より母をかえりみる場面を私たちは忘れてはならないと思えます。そしてイエス様の弟子である私たちも最後まで力を尽くして親を敬い、かえりみ、つかえるべきではないでしょうか。

特にイスラエルにはこのような慣習があります。すこし変に思われるから知れませんが、ユダヤ人たちが国際結婚をする場合、お母さんがユダヤ人で父が外国人である場合、その子どもたちはユダヤ人としてみられます。しかしその反対の場合、父がユダヤ人だとしても母が外国人である場合、その子どもたちはユダヤ人として認められないそうです。これは母が子どもに与える影響がどれほど大きいのか表しています。もちろんお父さんも大切です。しかし、もっと多くの時間を子どもたちと過ごし、愛情を表している母がどれほど子どもの価値観や人生に大きく影響を与えているのかに対する教訓を我々に教えているのだと思えます。ユダヤ人の知恵の書には次のようなことが書かれています。

神様はこの世のどこにでもおられることはできませんでした。そういうわけで“私の代わりにあなたの母を送り出したのだ。私には背中がないので母を送って子供たちを背負わせたのだ。私には胸がないので母の胸で子供たちを抱かせた。私には命の乳腺(にゅうせん)がないため母を送り出して命の乳腺で子供たちを養ったのだ。私にはあたたかい手で守られないため母を送って彼らを育てたのだ。”つまり神様は神様の代理人として、愛の御手である母を送って私たちを養われたということです。

みなさんもよくご存知だと思いますが、人間の歴史の中で母という存在ほど大きく影響を与える存在はないと思えます。アメリカのルーズベルト(Roosevelt)大統領は母という存在についてこう語りました。“母は民族の魂を作りあげる最高の主人公である。母はどんなに成功した政治家よりも、成功した芸術家よりも、成功した事業家よりも、成功した科学者よりも我々の社会においてもっと必要な存在である。”

ナポレオンは有名なこの文章を残しました。“フランスに良い母を持たせるようにしなさい。そうすればフランスは良い子どもたちを生み出すであろう。”実は母というものは社会や未来の運命と歴史の方向を決め付ける主役です。母のいない世界、母の愛情が消え去った世界は想像もできません。今日は聖書に出てくる一人の偉大な母、母なるハンナを考えてみたいと思えます。母であるハンナをとおして今の時代に要求されている聖書的なお母さん像はなにであるかをともに考えて見たいと思えます。

## ＜2.母であるハンナはどんな人だったのでしょうか?＞

ハンナが住んでいた頃は時代的に暗く、国家的にも危機の時代でした。道徳的に堕落した時期でした。宗教は極めて腐敗し、価値観も不在していた時期でした。信仰の面においては預言者たちの叫び声もなく、英雄もいませんでした。これによって社会的にも、家庭的にも腐敗し、暗かった時期でした。この時代を生きていたハンナはどんな人でしたか。今日の本文1-2節をもう一度読んでみましょう。聖書から知らされるハンナについての内容は彼女の名前がハンナということと、エフライムの山地のとても小さい町に住んでいたということです。つまり本文はこう始まっているのです。“人々もだれも顧みていないこの山地の無名の町に神様はまことに美しい女、まことにすばらしい母一人を見つめておられました。その女がハンナです。”

しかし、この母なるハンナはお母さんたちが持てそうなあらゆる傷と弱さをもっていた女でした。彼女は家庭的にとっても不幸な女でした。自分の不妊のため夫であるエルカナはペニンナという女と浮気をしただけでなく、家に連れて来て一緒に住みつき、同じ家で三角関係に住まなければならない苦しみを受けていた女でした。

愛する信仰の家族のみなさん!

それにもかかわらず、この女が聖書に出てくるほど美しい女になったのにはいくつかの理由があります。あらゆる時代において

神様が認め、神様に喜ばされているハンナには良い母としてのいくつかの大切な要素をもっていました。今日我々が親として、母として学ばされるべきところはなんでしょうか。？

### <3. 母なるハンナから学ばされる教訓>

#### (1)ハンナは祈るお母さんでした。

ハンナは問題がない女ではありませんでした。むしろもっと悲しみがあふれ、情けない女でした。彼女には子どもがいませんでした。その時代に女にとって子どもを産めないほどつらいことはなかったと思います。毎年、子どもを連れて礼拝を捧げるために聖殿にのぼる親と子どもたちを見るたびに、どれほどつらく、苦しかったでしょうか。さらに夫であるエルカナは子どもを産めないハンナを待たず、ペニンナという女を家に連れてきた時、ハンナの心に満ち満ちた苦しみと悲しみと疎外感、孤独感、惨めさは十分感じることが出来ます(6節)。6節を読むと、後で入ったペニンナという女は無礼であって、ハンナをいらだたせるばかりです。

たくさんのなやみときずだらけのハンナでしたが、彼女には大切な武器が一つありました。この武器は争いや嫉妬ではありませんでした。それは祈りでした。この武器、祈りこそが平凡でもなく苦しみの中にあったこの女を偉大にさせました。ハンナはたくさんの教育を受けそうでもありません。家庭的にも良い背景でもなく、お金も多く持っているようにもみえません。かならずしも美貌だったのかもはっきりわかりません。それにもかかわらずこんにちの我々がこの母を覚える理由はこのハンナの祈りのためです。10節をみてみてください。“ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。”

彼女の祈りは声も出せなく内側でむせび泣き、泣きわめく祈りでした。12節をみて下さい。“ハンナが主の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。”どれほど恨めしかったのか彼女の祈る姿を通して十分推し測る事が出来ます。しかし、ハンナは自分のすべての悲しみと苦しみを知っておられる神様の御前に出て、その痛みを吐き出すことができました。

愛するお母さんたち、姉妹たちみなさん！ 祈りを通して自分のすべての問題をおろし、人々の前で自分の感情を出すより、生きておられる神様に自分のすべての感情を下ろすことができたハンナはたしかに祈りの武器をもっていた女に違いないと思います。17-18節をみてください。祭司であるエリをとおしてハンナの祈りが聞かれるという祝福をいただいたハンナはすぐこのように反応します。18節です。“彼女は、「はしためが、あなたのご好意にあずかることができますように。」と言った。それからこの女は帰って食事をした。彼女の顔は、もはや以前のようではなかった。”

まだ子どもは与えられてないですが、神様が自分の願いを聞いてくださるという確信を持ったとたん、心配と悲しみを下ろして喜びと平安のうちに戻るハンナの姿をみてください。彼女は漠然と祈っただけではなく、祈りをとおしてあらゆる悩みと問題を吐き出しただけでなく、神様は自分の祈りを聞き入れてくださるのだ、そして自分の祈りがかなえられたという確信をもって行動することができた実に祈りの人でした。彼女はたまたま一度祈っただけではありません。祈りの応答と確信があるまで続けて祈れた信仰の母でした。多くのクリスチャンの姉妹たちとお母さんたちは問題があれば祈ります。しかし、祈りの応答と確信が与えられるまで持続的には祈りません。悩みがあるとき祈りますが、祈りながらも確信がありません。この意味でハンナは完璧に祈りの模範を示してくれました。

19節と20節に即刻祈りが応えられます。ついに子どもができたのです。その子どもの名前は何ですか。あの有名な祭司サムエルです。サムエルの名前の意味は何ですか。‘私がこの子を主に願ったから。(20節)’です。そうです。神様にはある人に子どもを授けてくださることも、くださらないこともできます。子どもを授かったよりもっと大切なのはハンナが神様に求めたということです。もう一歩すすんで、考えて見て下さい。神様が授けてくださった子であったサムエルはどんな人でしたか。サムエルの生涯において一番すぐれた特徴と言えれば彼は祈りの人だったということです。サムエルは危機に置かれていた愛する祖国のために、そして、愛する家族のために、愛する社会と隣人のためにした告白を聞いてみてください。“私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。私はあなたがたに、よい正しい道を教えよう。”(第一サムエル12:23)

祈りの母ハンナの子、神様の預言者サムエルも祈りをやめることを罪だと知っていました。このような祈りの習慣と信仰をだれから教わったのでしょうか。そうです。祈りの母だったハンナからでした。アウグスティン(Augustine)の母であったモニカ(Monica)の告白を聞いてみてください。“涙もって祈る母の子どもは決して滅ぼされない。”

ジョセフパーカー(Joseph Parker)というすばらしい説教者であり指導者の一人がいました。彼は多くの人々に感動を与え、印象深い影響を与え、社会に業績を残しましたが、その理由をパーカー先生に問うと、先生は過去を振り返ってみながら、このように語りました。“いまも忘れられない一つの出来事があります。高校卒業後、大学の勉強のために家を出ようとした日、母は私を呼び寄せました。突然母は私に“おまえ、一つ約束をしてくれる”私は“どんな約束なのか内容を聞かないと?”という、“おまえが約束すると言うなら教えてあげよ。”と母は応えました。続いて母は“難しいのよ。決心さえすれば。おまえがそうすると約束すれば言うてあげる。”と同じく応えました。しばらく考えてから、“はい、お母さん、話してください。”という母はこのように言いました。“私はあなたをいままで祈りながら育ててきた。もう家から離れる今日、一つだけお願いする。一日を祈りで始まり、祈りで閉じてほしい。”“私が家を出たその日から母との約束は私の生活を支えてくれました。そして祈りたくないという誘惑が心に生じるたびに母の声は神様の御声のように私の心の中で働きました。私はひざまずいて祈りました。今日までこの祈りをもって生きてきました。その祈りが私の人生を作りあげてくれました。これが人生のすえにきている私の告白です。”とパーカー先生は告白しました。

愛するみなさんにこのようなチャレンジを与えたいです。2章1-10節は子どもを聖殿に預け、ささげるハンナの美しい祈りの内容です。この箇所をみると、ハンナが普段どれほど祈りの人であったのかが分かります。みなさんは祈る母ですか、祈る父ですか。？

#### (2)ハンナはきよい欲望と夢をもって神様にゆだねる事ができた母でした。

1章24節から28節をみるとハンナは乳離れしたばかりの愛する息子を連れて聖殿に行きます。そして聖殿に愛する息子を預けて

帰って来る場面です。親は子どもがなにかのために働いていることを誇らしく思います。国や人類のためにささげられたと誇る親もあります。しかし、これよりもっと偉大なビジョンと夢があります。それは神様に自分の子どもの人生をささげゆだねることです。

人間が持ちやすい錯覚の一つは“私のもの”という所有意識です。私のものはどこにありますか。すべて神様がぐださいました。だれがみなさんにいのちをぐださいましたか。だれが自分の誕生日時を定めたのですか。だれが息を吹き込んでぐださいましたか。だれも自分の最後の日を決めることはできません。自分にいのちを与え、自分の生存を定める方が神様であることを認めますか。その神様がいのちを与え、その神様が子どもを授け、健康を与え、その神様が人生の環境と気質も作りあげてぐださいました。そういうわけで、いま自分のものだと思っているすべては実は神様の贈り物にすぎません。それが神様の恩寵なのです。みなさんに与えられたその子どもがただの自分の子どもではなく神様のこどもだと思ふなら、みなさんはどのようにその子を育ちますか。自分の子どもは神様から授けられたのを認めますか。そうするなら、神様に返さなければなりません。そして、自分と自分の子どものためではなく、神様の栄光のために子どもを育てなければなりません。これが子どもを授けてぐださった神様に喜ばされることであり、神様の祝福をいただける秘訣です。多くのクリスチャンの親が子どもを信仰によって育てることに失敗する時がたくさんあります。信仰の生活とは別に、この世の成功の基準、出世基準に合わせて子供を育てるからです。ハンナは祈りによって子どもを授かったので、この子は神様から与えられたという信仰の確信がありました(27節)。そういうわけで、神様の栄光のために、自分の子どもをきよく、信実に、偉大に育てたいという霊的な野望がありました。

今日の本文のクライマックスが28節です。とつても印象的です。“それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。この子は一生涯、主に渡されたものです。」こうして彼らはそこで主を礼拝した。”乳離れしたばかりのサムエルはそこにおいて親は戻っています。つまり、この姿は“おお、主よ。この子を神様に預けます。これからこの子の背後に主がおられあなたの知恵と御言葉でこの子を導いてぐださい。”という意味でした。

神様にささげるといふことは決して損ではありません。それがむしろその子と家庭に祝福です。これでサムエルは将来、偉大な人サムエルになれたのです。それだけではなく、サムエルが神様にささげられた後、神様はさらに三人の息子と二人の娘をハンナに授けてぐださいました。

祈る母、神様からの授かりものとしていただいて、霊的な夢とビジョンをもって、神様に喜ばれる子どもとなるように神様に喜んでささげた母ハンナ!今日みなさんは神様の御前でどんな母であり、どんな父でしょうか。みなさんは祈るお母さんですか。それとも眠っているお母さんでしょうか。みなさんは心から神様に子どもの人生を委ねていますか。神様に喜ばれる子どもとして育てていますか。

ここにもう一人のお母さんを紹介します。この母は子どもがなんと19人もいました。当然自分の時間なんか作ることすらできなかった母でした。しかし、このお母さんには子どもたちに対するビジョンと夢がありました。

“私はこの19人の子ども全員を時代を揺り動かす神様の子として育てたい。幼いころから神様の御言葉をしっかりと覚え、御言葉を実践する子として育てたい。そして彼らは自分たちのいる場所から神様に栄光をささげて生きるように育てたい。”これがこの母の夢であり、祈りの課題でした。このためにこのお母さんは毎日子どもに聖書を教え、ともに祈り、祈りを教えました。神様の栄光のために生きようとするこの偉大な夢を子どもたちに植えさせました。このお母さんはいつも家庭は地球上神様が立たせた一番偉大な学校だと信じ、この言葉を残しました。“私の子どもの教育を学校にだけゆだねることはしない。私の涙と祈りと手のあかがついているわたしの聖書をもって子どもを育てよう。”このような母をとおして育てられた19人の子どもたちが偉大な指導者にならないわけがありません。子どもの中にはイギリスに一番の影響を与えた霊的指導者であるジョンウエスレ(John Wesley)がいるし、賛美歌の数々の曲を作詞したチャルスウエスレ(Charles Wesley),そのほかすべての兄弟たちも美しく真実な人生を送りました。このお母さんはスザンナー(Susannah)でした。

今日の時代を生きる親たちはどれだけ心配が多いのか分かりません。我々の子どもたちは学校に入ったとたん非聖書的な教育を受けます。世の教育は神様を否定し、神様の創造を否定する無神論的な進化論を教えています。不良の友達の影響も強く受けます。もしかすると自分の子どもが不良の友達に会って間違つて性的な誘惑や困らされたりしないのか。…悪い言葉遣いや行動などに振り回されないのか。などなど…しかし、みなさん、親の心配にはいつも限界があります。実際に助けてあげる力が親である我々にはいつも限界があります。どうしますか。我々もハンナのようにみなさんの子どもを神様にゆだねる決断と信仰と祈りが必要ではありませんか。?

ハンナは自分の大切な子であるサムエルを神様にささげ預けました。われわれもこのハンナから子どもを離す訓練と姿勢が必要です。離す時期になったとき、離すことも必要です。いまの時代は多くのお母さんたちが子どもを自分のものにおこうとしています。そういうわけで聖書は結婚を定義する時“それゆえ、人はその父と母を離れ”(エペソ5:31)と言います。

結婚は親から離れることであり、送り出さなければなりません。しかし、送り出す前に教えなければなりません。神様ときちんとつながるようにさせなければなりません。サムエルは聖殿のエリ祭司に預けられたとき、すでにサムエルは信仰の教育を母であるハンナからきちんと受けたため、聖殿で祈ることもできたし、祈りの中で神様にも出会えたことを聖書をとおしてわかる事ができます。

いつか我々の子どもたちも親から離れ独立する時が来るでしょう。その時が来るまで、みなさんには子どもが神様に祈り、神様の御言葉をもって神様と交わりができる信仰を持たせる責任がみなさんにあることを忘れないでぐださい。親にとって一番の祝福と喜びは自分の子どもが自分たちよりすぐれた信仰の人になり、神様の栄光のためにさらに尊く用いられることを見ることだと思ひます。今日神様の御前でみなさんはどんなお母さんですか。ハンナのようなお母さんになりませんか。ハンナの涙と悲しみを喜びに、祝福に取り替えてぐださった神様の恵みが皆さんと家庭の上にそそがれますようにお祈り申し上げます。アーメン!